

■読みに困難のある子どもたちへの実践事例

読み書きが苦手な児童(支援学級)の 意欲的な学びにつなげる

大阪府富田林市立大伴小学校
植木有理・植野瞳・藤原智美・尾川智子・磯口多恵子

支援学級に通う 子どもたちの実態

- 文字が二重に見える、歪んで見える、ゆっくり書くことができない、形がとることができない、線が一本多いまたは少ないなど、読み書きに対して、非常に苦手意識をもっている子どもが多い。
- 自分から、本を読むのが苦手である。
- 文字だけの本は、なかなか読みづらく、わかりにくい。
- 学校図書室まで行って、本を探したりする図書の時間は苦手。

「わいわい文庫」の利点

- 自分の教室で、いつでも手軽に読めること、また、カラー一覧表(写真入り)から、読みたい本を見つけ出すのが楽しみになってきている。
- 大型画面に映し出され、読みあげるスピードも調整できることで安心感をもつことができる。



「わいわい文庫」を使った 学習のねらい

- 英雄になった人の伝記を読むことで、社会科での理解を深める。
- はじめから最後まで聞く。

使用した作品

- 『ロバのシルベスターとまほうの小石』
- 『10分で読めるリーダー・英雄になった人の伝記』



実際の様子

①事前提示の仕方

〈個人〉

社会科での歴史上の人物と、「わいわい文庫」の一覧表を見せます。

②授業の様子

〈個人〉

一覧表の中から『10分で読めるリー

ダー・英雄になった人の伝記』を選んだ。「これ知ってる。この人がいい、この人読みたい」と自分から言うことができました。

③事後評価

〈個人〉

教科書や資料集では、見ることさえしなかった子どもが、「わいわい文庫」の伝記では、自分から読んでみようとする取り組みことができました。伝記を読むことで、通常学級での社会の授業にも参加することができました。

〈支援学級全体〉

もう慣れてきたので、大型テレビを用意するだけで、「何?」「～がいいな」など、「わいわい文庫」を楽しみにしています。「見やすい、聞きやすいところへきてもいいです」という声かけで、自分の椅子より前にいき、床にすわって、聞こうという子どももいました。

「また聞きたい」と全体タイムの時間を楽しみにしています。

〈1、2年生より〉

「読むところがハイライトされて、“今どこを読んでいるか” “どう読むか” がわかりやすいこと、“読みの速さが調整できる” ことがとてもよいです」という感想をいただきました。

指導を通して

高学年になってくると、教科書も一段

とむずかしくなってきます。国語だけでなく、社会、理科、算数、音楽、体育、図工、家庭など、各教科に関連した読み物が増えてくれるとありがたいです。

「わいわい文庫」から、各教科につなげていくことで、学習のハードルが低くなり、学習に取り組みやすくなるのではないかと思います。また、毎年新しい読み物が、仲間入りして、子どもたちも楽しみにしています。

「勉強」というかたくるしさではなく、楽しくわいわい文庫をよんでいるうちに、自然といろいろな知識が身についていると思います。本当にありがたいです。支援の必要な子どもたちはもちろん、ますますひろがっていけばいいと思っています。

